

Zelkova NEWS

No.26
May 2024

TOPIC s : 歯原性腫瘍 Odontogenic tumor

■ はじめに

動物の口腔内には様々な腫瘍が発生します。悪性黒色腫（メラノーマ）や扁平上皮癌、線維肉腫などの悪性腫瘍が問題になりやすいですが、今回は歯原性腫瘍について取り上げます。歯原性腫瘍は歯の構成要素に由来する腫瘍組織です。多くは良性ですが、局所侵襲性を示し、骨への浸潤を認める場合があるので、良性腫瘍といえども一定の注意が必要です。一口に歯原性腫瘍と言っても様々ですが、全てを紹介するには紙面が足りませんので、今回は病理医が診断する機会（≒臨床の先生方が出会う機会）が比較的多いと思われる腫瘍について、その組織像と共に簡単に紹介させていただきます。

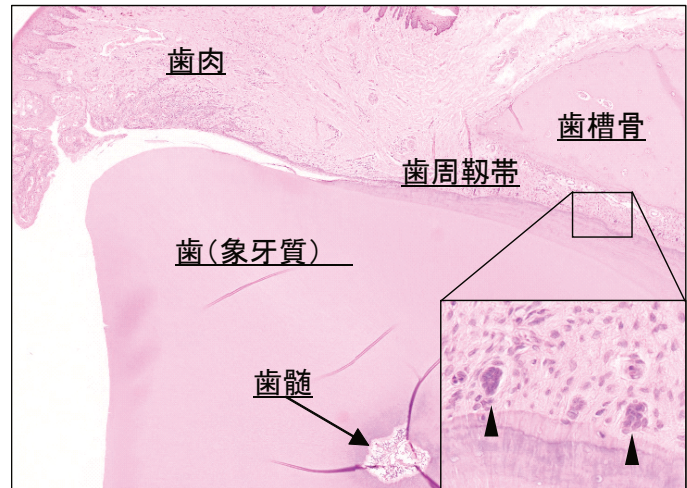


高橋 圭 DVM, Ph.D, DJCVP

■ 歯の発生と基本構造

歯の発生は複雑なので詳細は割愛しますが、発生に関与する歯胚はエナメル器、歯乳頭、歯小囊の3つの要素に分類されます。歯乳頭は象牙質を形成して最終的には歯髄となり、エナメル器はエナメル質を形成し、歯小囊は歯周組織を誘導します。発生の過程で歯胚と口腔上皮を繋ぐ上皮細胞は退行しますが、一部は歯肉に残り、**セール Serres の上皮遺残**と呼ばれます。一方、歯根の形成に関与したエナメル上皮の一部は歯周組織（歯周靭帯）に残存し、こちらは**マラッセ Malassez の上皮遺残**と呼ばれます。これらの遺残した上皮細胞が炎症などの刺激にともなって増殖し、後述の**歯原性腫瘍を形成するもの**と考えられています。

図1：歯および周囲組織。歯周靭帯（挿入図）では歯原性上皮集塊（マラッセの上皮遺残：矢頭）を散見する。



■ 動物の歯原性腫瘍

動物の歯原性腫瘍について、WHO分類ではその構成成分によって**1.歯原性間葉組織を伴わない歯原性上皮性腫瘍、2.歯原性間葉組織を伴う歯原性上皮性腫瘍、3.歯原性外胚葉由来腫瘍、4.歯周靭帯由来腫瘍**の4つに分類されます（3については馬でのみ発生が報告されており、今回は割愛します）。

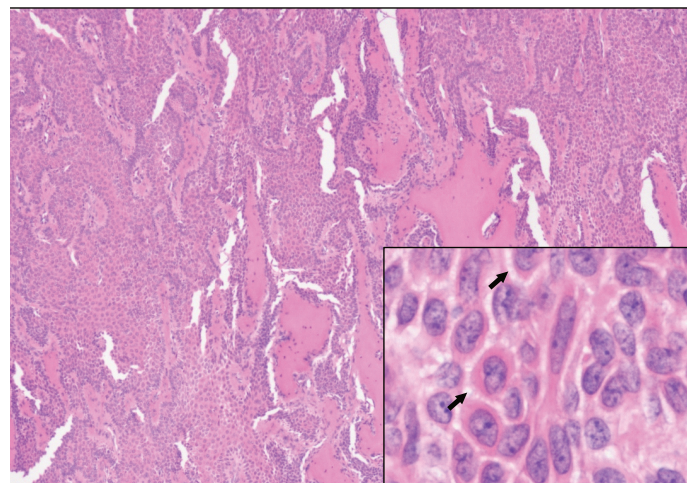
また、歯肉の病変について使われる「**エプリス**」という用語ですが、これは「**歯肉に生じた限局性の良性腫瘤病変**」をまとめて表現する臨床的診断名です。歯肉過形成や歯肉炎による歯肉腫脹なども含まれる大まかな表現のため、現在はこの用語を病理診断に用いられることは少なくなっています。

1.歯原性間葉組織を伴わない歯原性上皮由来腫瘍

・犬の棘細胞腫性エナメル上皮腫

棘細胞腫性エナメル上皮腫は**犬で最も一般的な歯原性上皮由来腫瘍**です。多くは吻側歯肉に発生し、外向性に隆起したカリフラワー状の腫瘤を形成します。他の動物での発生が非常に稀であることから、一般的には「犬の棘細胞性エナメル上皮腫」と呼ばれます。腫瘍組織では、多角形の腫瘍細胞がシート状、索状あるいは網目状構造をとりながら増殖します。腫瘍細胞が明瞭な細胞間橋を有することが大きな特徴です。腫瘍細胞の異型性は低いですが、顎骨への強い浸潤性を示すことが知られています。治療に関しては外科切除が有効であり、マージンが狭小であっても完全切除であれば再発は稀とされています。転移の報告はありません。

図2：犬の棘細胞腫性エナメル上皮腫。多角形の腫瘍細胞が骨浸潤を伴いながら増殖する。腫瘍細胞は明瞭な細胞間橋を有する（挿入図、矢印）。



・エナメル上皮腫

エナメル上皮腫で増殖する腫瘍細胞は、歯の発生においてエナメル器を形成するエナメル芽細胞や星状網細胞に類似した形態を示し、索状、網状あるいは小型巣状構造をとりながら増殖します。また、増殖巣にはしばしば角化傾向を認めます。病理診断では上記のイヌ棘細胞腫性エナメル上皮腫との鑑別が重要となりますが、エナメル上皮腫は骨内に発生してしばしば嚢胞状病変を形成するのに対して、棘細胞腫性エナメル上皮腫の病変は歯肉に主座する点が鑑別のポイントとされています。

エナメル上皮腫は犬や猫以外にも様々な動物種で発生しますが、ウサギでは歯肉以外の口腔粘膜にもエナメル上皮腫様の腫瘍が発生することが報告されており（Murphy et al., Vet Pathol.2023）、当センターでも昨年1例のみ経験があります。こちらの腫瘍は発生時に遺残した歯芽組織に由来するものとされていますが、詳細な病理発生は明らかになっていません。

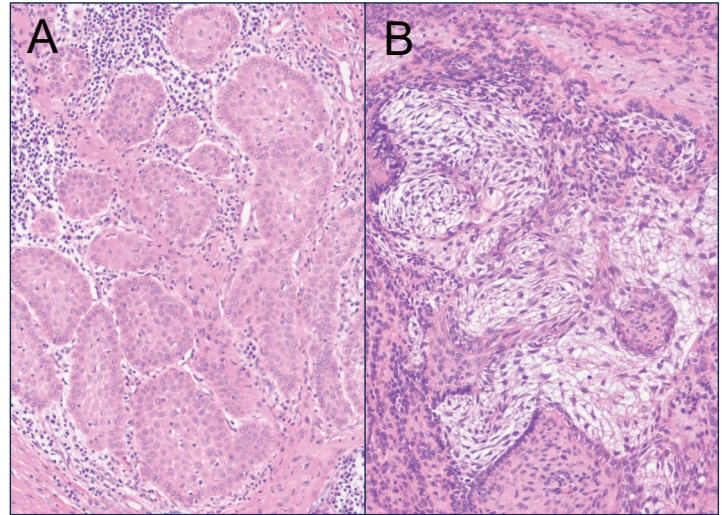


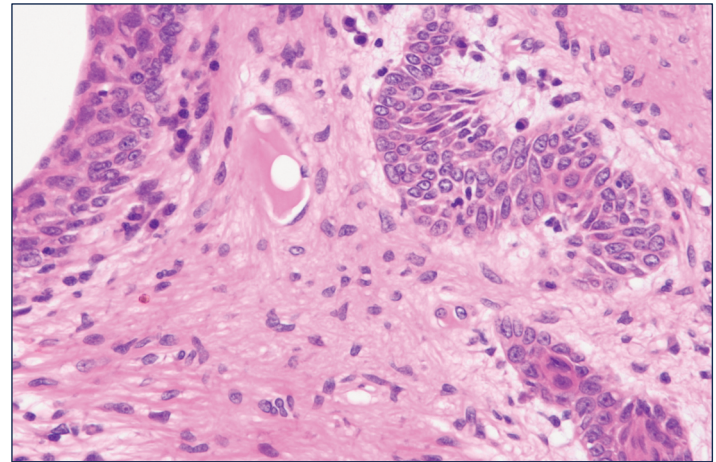
図3：エナメル上皮腫。歯原性上皮に由来する腫瘍細胞の増殖を認める。腫瘍細胞は多様な形態を示し、角化傾向を示すもの（A）や、星状網に類似した形態を示すもの（B）を認める。

2.歯原性間葉組織を伴う歯原性上皮由来腫瘍

・エナメル上皮線維腫

エナメル上皮線維腫は歯原性上皮に由来する上皮性腫瘍細胞の増殖と、歯髄の間質に類似する間葉性腫瘍細胞の増殖が混在して観察される腫瘍組織です。上皮性腫瘍細胞は多角形で、索状、島状構造をとりながら増殖します。間葉性腫瘍細胞は紡錘形から星芒形で、間質には膠原線維の増生を伴います。症例数が比較的少ないことから予後についての情報は乏しいですが、一般的には切除により予後良好とされています。

図4：エナメル上皮線維腫。歯原性上皮に由来する上皮性腫瘍細胞と間葉性腫瘍細胞が混在して増殖する。



4.歯周靭帯由来腫瘍

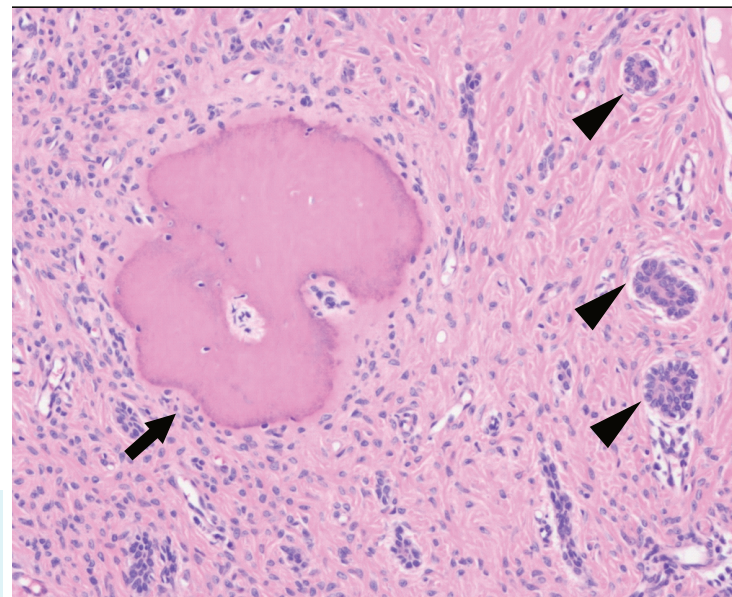
・線維腫性歯肉腫（歯周靭帯線維腫）

線維腫性歯肉腫は歯周靭帯に由来する腫瘤状病変です。動物特有の歯原性腫瘍の分類である第4のグループ（歯周靭帯由来腫瘍）に属していますが、反応性過形成による病理発生が示唆されており、**真の腫瘍か否かについては未だに議論があります。**犬で一般的な疾患ですが、猫でも発生します。

組織像としては紡錘形の線維芽細胞に類似した腫瘍細胞が間質に膠原線維の増生を伴いながら増殖します。腫瘍組織内には骨組織の形成および歯原性上皮の小集塊を認める場合があります。

腫瘍組織は通常隣接する歯や顎骨への浸潤を認めませんが、隣接部の領域はマージン確保が困難な場合があり、そういった症例では再発の可能性があります。また、本病変は症例によって増殖細胞の密度にばらつきがありますが、これによる予後の違いなどについては明らかになっていません。

図5：線維腫性歯肉腫。紡錘形の腫瘍細胞が間質に膠原線維の増生を伴いながら増殖する。腫瘍組織内には骨組織（矢印）や歯原性上皮（矢頭）を認める。



過去のニュース



アンケート

ホームページにて過去のセルコバニュースを配信しています。【パスワード：SZ-news】
また、今後、取り上げてもらいたい病理トピックを募集しています。
（右側QRコードからメール送信をお願いいたします。ご応募お待ちしております。）